

□ 評 論

大 坪 盛

「柴田南雄音楽評論賞」がアリオ音楽財団から桐朋学園に運営を移して2年、今年度も昨年度に続き受賞者が出なかった。「アリオ賞」の「音楽評論部門」として1988年にスタートしたこの評論賞は、今年生誕100年を迎える作曲家の柴田南雄が同賞の選考委員でもあり、作曲と同時にその博覧強記ぶりを發揮して評論・批評活動を展開した同氏の業績を称え「柴田南雄音楽評論賞」と改称、新人音楽評論家の登龍門として、2007年からは毎年実施されてきた。創設当初から12人の「奨励賞」受賞者を出したが「本賞」へのハードルは高く、スタートから24年目、改称後16年目にして初の「本賞」受賞者として澤谷夏樹が選ばれ翌年も秋元陽平が2年連続の「本賞」受賞者となったが、再び2年連続で本賞も奨励賞も選出されなかったのは残念である。

「柴田南雄音楽評論賞」が新人の登龍門とすれば、「吉田秀和賞」は対象を広くした芸術評論賞といえる。「柴田南雄音楽評論賞」は公募制であるが、「吉田秀和賞」はその年度内に上梓された著作に対して授与される。又「吉田秀和賞」は対象は音楽だけに限らず、美術、演劇、建築、写真など芸術書全般が対象となっている。審査員は創設当初は吉田秀和、加藤周一、林光が選考に当たっていたが、現在は磯崎新、片山杜秀の2人が就いている。

第25回（平成27年度）は、美術評論家の樫木野衣（さわらぎのい）著「後美術論」が受賞した。選考委員の片山は「本書が描くのは資本主義と『アート』の最終戦争。これぞ『3・11』後の芸術批評である。」と激賞している。「吉田秀和賞」は平成3年度の第1回より、音楽関係が10人、美術関係が7人、演劇、建築、映画関係各1人が選ばれている。（該当者なしが4回）因に音楽関係者は、秋山邦晴「エリック・サティ覚え書」、長木誠司「フェッルッチョ・ブゾーニ」、伊東信宏「バルトーク」、青柳いずみこ「翼のはえた指 評伝 安川加壽子」、宮澤淳一「グレン・グールド論」、片山杜秀「音盤考現学」「音盤博物詩」、岡田暁生「音楽の聴き方」、白石美雪「ジョン・ケージ 混沌ではなくアナーキー」、椎名亮輔「テオダ・ド・セヴラック 南仏の風、郷愁の音通」、通崎睦美「木琴デイズ 平岡養一『天衣無縫の音楽人生』」の10人。吉田秀和の評論が対象の広さを示すのが如く、「吉田秀和賞」の対象もウイングを幅広く設定しているのが特徴。建築家の磯崎新、社会思想史、音楽評論の片山杜秀の選考委員体制となって更にその翼が広く大きくなっていくことと思われる。

音楽関係の書籍に与えられる賞としてもう一つ「ミュージック・ペンクラブ賞」があるが、その第27回〈クラシック部門〉の「研究評論部門賞」で後藤暢子「山田耕柝－作るのではなく生む」が受賞した。前記の「吉田秀和賞」の幾つかの受賞作と同様に優れた評伝といえ、受賞作は山田耕柝研究の泰斗として著名な後藤暢子の優れた作曲家論として音楽名著の列に加わって来ない。

一昨年末に音楽評論家の遠山一行が逝去し、2012年死去の吉田秀和とともに音楽評論界の2人の大御所的存在が世を去ったことに、音楽批評の一つの時代が終わったことを感じる。プロフェッショナルな音楽評論の草分け的存在である大田黒元雄、堀内敬三、野村光一などが活躍した時代、戦後の山根銀二、園

部三郎などの時代を経て、吉田秀和、遠山一行の世代となるが、吉田・遠山はそれ以前の音楽評論と違い、イデオロギーやディレッタントイズムを排したいわば「純粹批評」を追求した。2人とも若かりし頃に文芸評論家・小林秀雄の「モーツァルト」に触発され、吉田は「音楽評論は可能だ」と思い、遠山も批評の自立を求めた活動を展開するようになる。

吉田、遠山の音楽批評について、月刊「音楽現代」誌、2015年4月号掲載の特別企画「追悼遠山一行～その人を批評」を機に音楽評論家・丘山万里子が「遠山一行と吉田秀和」を6回にわたり同誌に連載している。その最終回で丘山は、「批評は演奏。河上（徹太郎、遠山が信奉した文芸評論家、音楽評論も執筆、筆者注）、遠山、小林（秀雄）、吉田、みな『批評は演奏』というところに帰結する。経験の、音の『はかなさ』から紡がれる、言葉による演奏とは何か。それが遠山、吉田の語りかける課題であり、今日の批評に問われることがらだろう。」と締めくくっている。吉田のいう「何で他人の音楽をきくと、ものがいってみたくなくなるのか。それではき出せるものは、自分のへどだけだ。それなら、そのへどこ書いてほしいのであって、ほかのことは、みんな世間体でしかない」「自分の立場を死守せよ」という言葉を今こそかみしめたい。

尚、丘山万里子は「遠山一行と吉田秀和」を連載後、ウェブ上での音楽批評誌「メルキュール・デザール」をスタートさせた。スタート時のメッセージで丘山は「コマーシャルイズムとは一線を画し、音楽の創造から享受に至る全ての人々との交感と相互刺激が、音楽文化の真の成熟への新たな軌道となることを願う。批評は呼びかけと考えて。」と呼びかける。丘山の連載評論と、東京藝術大学名誉教授・船山隆の評論が不定期連載されているのが注目である。

作曲家の一柳慧が「一柳慧コンテンツ賞」を創設した。受賞対象に音楽批評も含まれる。「芸術音楽の充実と活性化、また音楽を通じた豊かな社会の創造を目的とし、芸術音楽を基軸に優れた活動を行なっている音楽家（作曲家、パフォーマー、評論家）を対象」に一柳慧自身が選考するもの。批評・評論だけが対象ではないが、音楽評論家にとっては朗報に違いないので、奮起を期待したい。

2015年はシベリウス、ニールセンの生誕150年を迎えたが、北欧音楽関係の出版物としては、新田ユリ「ボヒヨラの調べ」、神部智「シベリウスの交響曲とその時代」があげられる。その他の主な出版書もあげておこう。野平一郎「作曲家からみたピアノ進化論」、椎名雄一郎「パイプオルガン入門」、水原眞理「アメリカ音楽博士号D.M.A.のすすめ」齋藤桂「〈裏〉日本音楽史」、館野泉「命の響」、M・ハンベ「オペラの学校」、ケネス・シルヴァーマン「ジョン・ケージ伝」、アレックス・ロス「これを聴け」、ハンス・ウルリッヒ・オプリスト「ミュージック」、上地隆裕「世界のオーケストラ1～北米・南米編」、磯山雅「モーツァルト最後の4年」、など。又、吉田秀和「名曲のたのしみ」（全5巻）、新忠篤／大原哲夫編「モーツァルト『伝説の録音』」が完結した。書籍ではないが文芸雑誌「群像」に連載の片山杜秀「鬼子の歌－近代日本音楽名作手帖」、朝日新聞夕刊に連載の吉田純子「音を継ぐ～戦後とクラシック」にも注目したい。

今年の初めに文芸雑誌「すばる」が「継承される批評」という特集を組んでいる。又、現代の批評界を牽引する柄谷行人の「定本柄谷行人文学論集」の刊行や、「新潮」「文学界」の2誌で3人の小林秀雄論が連載されており、文学界でも批評の問題が今注目を集めている。翻って音楽界も「音楽批評に何が可能か？」を今問い直す時期に来ているのではないか。その意味でも戦後の音楽批評を体系づけた音楽批評論の登場を期待したい。

音楽評論の相澤昭八郎、横溝亮一、オーディオ評論の江川三郎の各氏が亡くなっている。合掌。